

社会学部創立40周年記念行事を終えて

——歴史感覚を持った「役立つ知」へ向けて——

阿 部 潔

「現代社会における社会学的知の可能性」という統一テーマのもとに企画された一連の記念行事（講演会・シンポジウム）を振り返りながら、私なりに考えことを述べてみる。その際に、自分自身の「大学の知」との関わりをヒントにしてみたい。

「大学の知」と「社会の知」とは、現在どのような関係に置かれているのだろうか。「大学の知」の一つである社会学の課題とは何だろうか。一連の講演会やシンポジウムでは、こうした知をめぐる根本問題について様々な立場から多様な意見が交わされた。そのこと自体に、大きな意義があることはいうまでもない。安易に解答を求めるのではなく、考えるべき問いを立てる。なれ合いの合意を目指すのではなく、違いを差異として際立たせる。こうした議論のあり方は、今後も護っていくべき「大学の知」の遺産にほかならない。

しかし、講演やシンポジウムを通じて明らかにされた「大学の知／社会の知」をめぐる問題や課題の大きさと比較して、今後に向けた具体的な方策が十分に提示されたわけではない。当たり前のことだが、そうした問いへの「処方箋」は一つではない。具体的な解決策は、教員も学生も含め「大学の知」に携わる全ての人々が、それぞれの場で自分なりに講じていくよりほかないであろう。その意味では、記念行事を終えて「これから」どうするのか、まさに私たちに問われているのだ。

大学が現実社会から掛け離れてしまっている。あるいは「大学の知」は「社会の知」から置いてけぼりをくっている。こうした批判は、なにも今日に始まったことではない。私が学生として大学に身を置いていた80年代半ばには、それはもう決まり文句になっていた。だが、近年の「グローバル化」や「IT革命」との言葉で形容されるの社会の急速な変化を背景に、「大学の知」に対する危機意識はますます高まっている。「大学はこのままではダメだ」との認識は、心ある大学人ならば誰しもが持っているに違いない。だからこそ、「社会に開かれた大学」や「社会のニーズに対応した知識」を実現すべく涙ぐましい努力が各大学・各部局において試みられているのだろう。

「大学の知」と「社会の知」とが相互に連関を持ち、両者のあいだに交流がなされることは確かに必要であろう。しかし重要なことは、どのような「連関／交流」なのかである。本別冊の巻頭の文章で高坂氏が指摘している「役に立つ社会学」の多様性も、この点に関わってくるのだと思う。来るべき社会学的な知は、何に関して／誰にとって／どのような意味で役に立つのか。このことについて、講演会とシンポジウムを聞いていくなかで改めて考えさせられた。

私が大学生であった80年代、たしかに大学は社会と掛け離れていたように思う。あるいはそれは、60年代後半から70年代にかけて「大学の知」が過激なまでに「社会の知」へと飛び込んでいこうとしたことへの反動だったのかも知れない。当時の私にとって「社会

学」は、現実社会から距離を置き、そこからかけ離れることこそが存在根拠であったようにすら思われる。そして皮肉な言い方をすれば、そうした「大学の知」はそれなりに役に立っていた。なぜなら、実社会から身を離し「わたし」について考える機会を、「大学の知」はいくらかでも学生たちに提供していたからである。つまり、当時の時代状況下では、一度社会から離れて大学に引き籠ることに「わたし探し」という効用があった。このように回顧すれば、当時の「大学の知」をあまりに誉め過ぎであろうか。

だが、当時の状況と比較して現在の「大学の知」は、そうした「わたし探し」の欲求に十分応えているとは思われない。「わたし」を見失いがちな若者たちが怪し気な疑似宗教集団に引き込まれていくのを、「大学の知」はただ指をくわえて見ているだけではないだろうか。「あんな馬鹿げた教義をどうして大学生にもなって信じるのか」「子供騙しのトリックに易々と引っ掛かっている」との大学人による批評は、現在の「大学の知」が「社会」が抱く欲求に対して無効であることを問わず語っている。

どうして、このような事態が生じてしまったのだろうか。

90年代をさして「失われた10年」という言い方が、近年の論壇では流行りである。実際には、具体的に何が／誰にとって「失われた」のかは多様であろう。だか、バブル景気にうかれた80年代と比較して、90年代を何らかの「消失」や「損失」によって記憶／懐古することは、何とはなしに多くの人々の心情を掴んでいる。そのように考えた場合、90年代を通じて大学では何が「失われた」のだろうか。そもそもそれ以前に、「何かが失われた」との危機意識は大学において共有されていたのだろうか。

たしかに「大学改革」は多方面において積極的に試みられてきた。「国際」「情報」「政策」といった言葉を冠した新しい学部・学科が、日本の各地で生まれた。また、既存の学部も「時代にマッチ」すべく様々な改革を目指してきた。

しかしながら、いま冷静に振り返るとき、それら一連の過程に「失われた10年」と呼ぶある種の虚しさを感じるのは、果たして私だけであろうか。繰り返し唱えられた「大学は変わらねばならない」との命題自体に誤りはないであろう。だが、90年代に提示された改革への政策や処方箋によって、なにかが得られたと同時に、何ものかが確実に失われていったように私には思えて仕方がない。

80年代に社会学部で学びミレニアムの最初の年に再び本学に身を置く機会に恵まれた私の目に、創立40周年を迎えた関学社会学部の姿は、いわく言いがたく「懐かしい」ものに映る。90年代が変革の時代でありかつ「失われた10年」であったことを思うと、「懐かしさ」とは不思議な感情である。なぜなら、私はそこに15年の歳月を経て変わらぬ何ものかを感じているのだから。

もしかすると、我が母校・学部は90年代の荒波のなかで「深き眠り」に就いていたのかも知れない。そのことは、決して否定されるべきことではないだろう。周りの状況が絶望的に困難なとき、来るべき春に希望を託しつつ「越冬戦術」を取ることは、ひとつの立派な知恵である。とりわけ知的な世界においては。

今回の創立40周年記念行事は、待ちわびた春の訪れを告げるとともに「深き眠り」を醒ます起爆剤となり得るのではないだろうか。「現代社会における社会学的知の可能性」との問題意識のもとで「大学の知／社会の知」について論じられた様々な言説には、90年代とは違ったかたちで「役立つ知」を考えていくヒントが数多く含まれていたように思われる。

それでは今後、「社会学の知」はどのように役立つことができるのだろうか。記念行事を通じて考えたことを、一点だけ述べたい。それは「大学の知」における「歴史」の重要性である。ここで言う「歴史」とは、なにも大きな時代の流れや歴史的なイベントを意味するわけではない。そうではなく、個人レベルであれ社会レベルであれ、過去から現在そして未来へと繋がっていく「人々の関係性の蓄積」としての歴史である。

「大学の知」の役立ち方の一つとして、そうした「歴史」を若い人たちに実感／認識／実践させることがあるのではないだろうか。今を生きる学生たちが社会との関わりのなかで「わたし」を感じ取り、さらに「現在」を起点として過去や未来について思いを馳せることを手助けするような「知」のあり方。現在求められている「大学の知／社会の知」の連関／交流の一つの可能態として、そのような「社会的な知」を構想することは決して無駄ではないだろう。

自分が学生だった頃と比べて、今の学生たちの「社会」への関心は決して低くはない。むしろ、学生のあいだでのボランティア人口の増加やNPO活動の活況が物語るように、「自己」から出発しながら「他者」を志向する動きは確実に高まっている。こうした「社会の知」の地殻変動を受けて、若い人々に向けて自己／他者を「歴史」を媒介に紡ぎ合わせるような「知」を提供することは、ほかならぬ社会学が担うべき役割であるに違いない。

私たちに課せられた「これから」の課題は重く、そして意義深い。